

二次元ぷち文庫

# 騎士教官 シエル

暗黒騎士の策略

新居佑

表紙イラスト：まゆ

試し読み版



当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『騎士教官シエル 暗黒騎士の策略』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



# 騎士教官 シエル

暗黒騎士の策略

新居佑

表紙 / ましゅー

# 登場人物紹介

## Characters

---

### シエル

王国の騎士養成学園の剣技教官。自らも元は“王国最高の騎士”と称されるほどの英雄的騎士であった。

### 黒衣の騎士

王国と対立関係にある教団側の暗殺者。シエルの最大の敵。

「でやあああああつっ！」

若さに満ちた掛け声が嗜れ渡る青空に響き、降り注ぐ陽光を反射しながら、高く掲げられた剣が振り下ろされる。

若者らしい真っ直ぐな気持ちの乗った一撃だ。速さ、重さ、どれをとっても使い手の最高の一振りだと自信を持って言える。

「……だが、まだ荒い……っ」

ギンツツ！

艶のあるアルトが奏でるわずかな眩きの直後、銀の鎧を纏った女騎士は、長い黒髪を揺らめかせ、握った長剣で少年が放った一閃を頭上で楽々と受け止める。

「なっ?! くっ、まだあああつっ！」

少年はなおも食い下がろうと、一度止められた刃に新たな力を込める。所詮は男と女、己と女騎士との体重差を利用して押しきろうと判断したのだろう。がっしりとした身体の全体重を握った剣に勢いよく乗せる。

だが若い少年剣士が、そのわずかなおごりが間違いであったことに気づくまで、もの五秒もかからなかった。

「まだ荒いと言っただろう？ 力押しだけでは……っっ！」

女騎士の身体が刀身を交錯させたまま、さながら華麗な舞いを踊るように両腕を掲げ、

ギョーンツツと勢いよく回転する。

「なっ!? うわっつ……とっつ……っ!」

溜め込んでいた力点を瞬時に崩され、少年の身体がズルツと前のめりに倒れこむ。情けなく片膝をついた少年が振り返った瞳の先には、女騎士の磨きこまれた銀の剣の刃先がはつきりとしたスローモーションで映っていた。

振りかぶられたまさに必殺の一撃が、男の首筋に迫る。瞬間――。

「そこまでです!」

審判役である女生徒の高い声が爽やかな午前の庭に響いた。その声に合わせるように女騎士の繰り出した切っ先が、少年の首筋ギリギリでピタリと止まる。

「ふ……ふえ、ほ、ほんとに死ぬかと思った……」

本気で殺<sup>や</sup>られると感じたのだろう。大量の冷や汗を流しながら、地べたに倒れこんだままの少年騎士がふうと大きく息を吐き出す。

そんな情けなくもかわいらしい生徒を見つめながら、勝利した女騎士は、ふっといじらしい微笑をその美貌に浮かべ、すぐにやれやれと軽い溜め息を吐いて言った。

「まったく。己の一撃に全精力を注ぐ余り、相手の動きに対応できないとは。評価はそうだな……45点といったところだな」

「よ、よんじゅう……そんな、あれだけ頑張ったのに赤点なんて……おとお」

先ほどの模擬戦に対する厳しい採点を突きつけられた少年が、ガクリと地面に手を突いて思いきり落ち込む。自身の全力を軽く受け流された拳句の赤点だ。無理もない。

「まあ、途中からの対応はいただけないが、初めの打ち込みはいい一太刀だった。その気概を忘れるなよ」

そう言つて女騎士は剣を鞘に納めると、今まで長剣を握っていた右手を、倒れこんだままの少年にそつと差し伸べる。

「あ、ありがとうございます！ 俺、これからもつと頑張りますから、シエル教官みたいな立派な騎士になれるように！」

「そ、そうか。頑張れよ。お前たちの……そしてこの国のために我々騎士はあるのだから。だから私はここにいるんだ。お前たちの夢の支えになれるように」

そうわずかに頬を赤らめながら、シエル——王国の騎士養成学園の剣技教官は、厳しかった表情にわずかな笑みが浮かべた。

若くして現役を退いてはいるが、王国のために幾多の外敵を斬り払ってきた黒髪の女騎士は、王族や貴族はおろか庶民たちにもいたるまで、今でも幅広く熱狂的な人気を誇っている。もちろん、王国最高の騎士として国から評価された厳しくも優しい人柄や、圧倒的な剣技能力に憧れる若い騎士見習いの生徒たちからの支持も非常に高い。

実際、彼女の育てた騎士たちは皆優秀で、多数の教え子たちが王国の発展と平和のため

に尽力している。

そして勇壯無比な女騎士の魅力を更に高めているのが、とても男勝りの女騎士とは思えない誰もがうらやむような扇情的な肉体だ。

美しく艶やかなサイドアップの黒髪に、透き通るような色白の肌とキリリとした目鼻立ちには、強い意志と己の実力への絶対的な自信が表れている。

平均的な女子の身長より若干高い背丈を包むのは、白銀にあしらわれた軽装鎧だ。胸には刻まれた剣技教官の証である狼の紋章が煌めいている。

全身に纏うある種の高貴ささえ漂わせる凜とした雰囲気は、かつて、王国最高の騎士と謳われた頃とまるで変わらない精悍さを誇っている。

二十代前半の女体は、日頃の鍛錬で必要十分に引き締められており、熟した果実のような女肉が、女騎士に柔らかく、それでいて刺激的な女性のグラマラスさをより鮮烈にアピールする。

肉感たっぷりの豊満バストは、きつく引き締めた胸当てを押し返さんばかりのたまらない弾力を備えており、キュキュツと引き締まったウエストと、丈の短いスカートの後ろから覗くボンツと張り出したお尻が生み出す悩ましいプロポーションは、若い騎士たちの視線を捉えて放さない。

黒タイトの上から覗くムッチリと実った太腿は、妖艶ささえ漂わせる色つぼさで、赤い



マントと銀の鎧とブーツを身に纏い長剣を地面に突き立てている姿は、さながら戦場に舞い降りた美の女神のような神々しささえ放っている。

年半ばの少女たちでは決して出せない、芳しい大人の色香が、本人も知らずに身体中から溢れ出している。

おかげで剣技訓練中に、シエルのムンとした花園に食い込む大人びたシヨーツやふくよかな胸元を覗こうとして、学園中を何周もさせられた生徒たちは数知れない。

「さて……次は誰だ？ 私に一撃入れられないようじゃ、国を守る立派な騎士にはなれないぞ！」

わずかな休憩の後、再び訓練を開始しようと、シエルは生徒たちに声をかけた。

そのとき、

「きゃああああっつつつ！」

「うわああああっつつつ！」

それまで穏やかだった庭園に、生徒たちの悲鳴が響き渡った。

「な、なんだ……つつつ!!」

シエルが気づいたときには、辺りは薄暗い世界に包まれていた。空や花たち、地面までもが灰色と黒のモノクロに覆われている。

「っ!! お、お前たち……つつ!!」

蕩けそうな感覚が、下半身はおろか身体全体にまで広がってきている。

鎧に押し込まれた溢れんばかりの巨乳は、すでにビンビンに張り詰めており、先端の赤い突起は、小指ほどのサイズにまで勃起し、ジンジンと熱い刺激を放ち続けている。

全身からはツンとした発情臭ともいえる牝の香りが染み出してきており、セクシーな女教官が、たまらない快感に侵されているのが丸分かりだ。

「それでは、もう一度啜えてもらいましょうか？」

「んぶぶつつ！ むふううつつ！んじゆるぶつつ！ むんんんつつ！」

再び口の中に侵入してきた剛直が、嫌がる舌を無理やり絡みつかせるように前後に振られる。

「今度はどうですか？ 口の中がだんだん熱くて甘くてたまらなくなってきたんじゃないですか？」

「んぶああつつつ！ んぐ、んぐうつつ！ はあうつ、んべちゆるつつ、んじゆるつつ……じゆるつつ、んちゅつつ……ふむむうつつ！」

先ほどとは全く違った感覚が、シエルの口内を支配する。

溢れる嫌悪感で一杯だった心が、舌先からの痺れるような甘い波動に強く揺さぶられていく。

（な、なんで……この、感覚うつつ！ へ、変だ……あおおうつつ！ あ、頭の中がトロ

トロ口になっていくみたい……舌が、勝手に……こいつのペニスを……っ。んちゅうつつ、じゅじゅる、ふぶうっ、れるれる……ちゅちゅうっ)

頬が感じたことがないくらいに紅潮しているのが分かった。

教官としてしてはならないことだと分かっただけはいるが、勢いづいた舌の動きが止められない。

「ああ、イイですよ。やればできるじゃないですか。おいしいでしょう、僕のチンポ汁は。エッチな顔ですねえ。腰の振り方といい、とても才色兼備の女教官とは思えませんよ」

黒騎士はそう言っ、更にグイッと腰を押しつけてくる。いきり立った肉棒が、喉の奥付近にまで到達し、思わずむせて吐き出してしまふ。

柔らかい紅色の唇から吐き出された剛直から、ネットとした淫靡な唾と先走り汁がポタポタと、カビ臭い用具室に零れ落ちる。

「げほげほ……っ！ ふぐっ、んむちゅっ……はあはあっ、く……これは媚薬の……ああっ、せいだろっ！ はああっ、見ている……必ずお前を倒して生徒たちを……救ってみせるっ！」

「ふふ、素晴らしい精神力と言いたいところですが。実はもう感じまくってたまらないんですよう？ さあ、素直にしてあげますよ教官」

ガツと男の手が、肩で息をするシエルの後頭部を掴む。そのままグイッと三度目のフェ

ラを強制される。

「ふぐううつつ！ んぐつつ、じゆるつつ……れるおおつつ、んぐつつ、んぶううつつ！」

（あ、ああ……こんな、バカな……つつ。口の中が……気持ち、イイ、なんてつつ！ くあつつ、舌が、止まらないつつ！ んちゆるつつ！ 身体が熱いいつつ！）

強い意志の言葉を発してみても、身体感覚が麗しの女教官を裏切っていく。

舌から発せられる感覚は、もう疑いの余地もなく快楽そのものだった。

生徒を人質にとられて憎いはずの男の肉棒を、女騎士の舌が舐めるたびに、どうしようもなく甘美な刺激が脳神経をおろか身体全体に響き渡る。

「んぐつつ！ んぐぐつつ……べちよくちゅつつ、ちゆるるつつ、はあはあ……んちゆるううつつ！」

大人の女の肉体が、溢れる快感を貪欲に受け止め、反応を起こす。

胸やお尻といった全身のあらゆる性感帯が、ビクツと大きくわななき、たまらなくエロティックなフェロモンを身体中から発散させる。

拘束された美肉がどんどん熱く火照っていき、舌がまるで愛しい人のモノをねぶるように、男の逸物に絡みつく。

「んべちゆるつつ、じゆるじゆるつつ……ぬちゅつつ、れる……はあ、じゆるるるつ

っ！」

（き、気持ちイイつつ！　だめだ……こんな気持ちになつては……私は生徒たちを助け  
ないと……んんんつつ！　で、でも気持ち、昂つて……悔しいのに……だめなのに……  
つつ）

想いとは裏腹に、拙かった舌使いがどンドン激しく濃厚なものになつていくのが自分で  
もわかつた。

騎士として、教官として一途な人生を歩んできた中で放置され続けた牝の本能が、一氣  
に覚醒していくのを、内側から強く感じる。

「くく、すごい吸いつきですね。いくら媚薬を使ったからつて乱れすぎですよ。相当男に  
飢えてたんですね」

男の嘲りが、残つた理性の悔しさを搔きたてる。

けれどどうしようもない。口の中の肉棒へ舌が絡み、口全体をすぼめて吸いついていく。  
「んぐううつつ！　くちゆくちゆ……ちゆぱあつつ……はぐつつ、むふううつつ」

（み、認めてたまるか……ああ、こんな気持ちイイなんて……うう、堪えろつつ。生徒た  
ちが待つてるんだぞ……これくらい堪え……つつ!!）

溢れくる淫靡な感情を必死に押し返そうとする女騎士を、更なる責め苦が容赦なく襲う。

ヴヴヴツツ！　ヴヴヴヴツツ！

「んぐふうううつつつ!! んぐんぐつつ! ふじゆるつつ! ふぐうううつつつ!」  
 何の前触れもなく、股間に突きこまれていた淫蟲の身体が激しい全身痙攣を始めた。  
 すでにぐつちよりと濡れそぼったシエルの陰唇が、突然の強烈すぎる刺激に悶えわなな  
 く。

「ははっ、すみませんねシエル教官。いえ、上の口ばかりでは寂しいだろうと思ひましてね。  
 う、く……感じているようです。吸いつきが更にきつくなりましたよ。おやおや、下の  
 方も大洪水ですね。臭い汁が溢れまくってますよ」

「んぐちゆるつつつ! ふちゆつつ……はあはあ、れろえろ……ちゆちゆつつ、ちゆぱつ  
 つ、あはあつつ」

新たに生まれた女唇の快感に、脳内で白い火花が舞い踊る。

きつい角度でMの字に開かれた下半身が、狂ったように跳ねまわり、卑猥な化け物を呑  
 み込んだ縦スジからは、まるで壊れた蛇口のようにブシュブシュと、半透明の粘っこい女  
 汁が辺り一面にぶちまけられている。

すでに女教官としての恥も外聞も投げ捨てたような、赤らんで蕩けきった美貌には、完  
 全な快楽への欲求が浮き出ている。

盛りをついた牝猫のように、身体全体をくねらせ、股間と唇から怒涛のごとく発せられ  
 る魔の快感を熟れた肉体で味わい尽くす。

(だ、だめだ……き、気持ちイイツツッ！ 口もアソコも……弄ばれているのに、たまらないっつっ！ あおううっつ！ 悔しい……気持ちイイツツ！ 悔しい、気持ちイイっつ。おおっつっ、気持ちイイイツツッ！)

ビチビチと張り詰めた豊満すぎる肉体を、グイグイと上下前後させる、あまりに激しく淫らなシエルの感じ方に、ガシャガシャと鎖が揺れる。

身体中の汗腺は完全に開ききり、狭い用具室に発情した牝の香りが充満する。

凜々しかった相貌は、溢れ出した涙と鼻水と涎にまみれている。

垂れ下がった眉毛と赤くなつた頬のまま、ジュブジュブと淫らな音を立てながら首を前後に動かす様が、清廉な女教官が感じる快感の深さを物語る。

(あ、ああっつっ、だめ……このままじゃ……イクツツ！ 敵の前でイっつてしまっつっ！)

背筋を駆け上がるゾワゾワとした感覚が、女の絶頂が近いことを知らせる。

生徒たちを助けるためには、快楽などに屈するわけには決していかない。それは分かっている。

これまで培ってきた強い意志を集めて、今すぐに男の淫靡な責めから逃れなければならぬ。けれど――。

「んぐじゅるっつっつ！ むふううっつ！ ちゆるちゆるっつ！ ぶじゅるうっつ！」

(止まらないっっ！ 身体がもう火照って気が狂いそうだっっ！ あ、あああっっ……  
こんな奴のペニスが放せない……っっ。もつとむしゃぶりついていないと、おかしくなる  
っっっ！)

瞳からどんだん涙が溢れてくる。

教官としての屈辱の感情と、一匹の牝としての猥褻な感情が脳内を激しく交差し、理性をかき乱す。

けれど、身体は卑猥に動き、プリンとしたお尻が物欲しそうに前後に振られ、自身の愛液でベトベトの陰唇は、知らないうちに火傷しそうなくらいの熱を帯びている。

もうこの期に及んで、高潔な女騎士には戻れない。戻れるわけがなかった。

「もう限界のようですね。くっ、僕もです。さあシエル教官。熱い精液ですよ。残らず飲み干してくださいね」

言った黒衣の騎士の肉棒がブクンッと膨らんだような気がした。

すでにイラマチオはされていない。

シエルの牝の本能が、自分の意志で男の剛直を舐めしゃぶっている。

「んべじゅるっっっ！ ふおおおっっっ！ じゅるっつべちゅっつ！ おおっつ、れろれろ……くほおうっっ！ じゅるちゅううっつっ！」

極上のレア肉よりも柔らかく繊細な舌先が、滾る男の欲棒に情欲の微熱を送る。



膨れた雁首の先端を軽く舐めた後に、バキュームのような吸いつきで一気に男汁を味わい尽くす。

唇から喉奥にまでは突きこまれた肉竿を丹念に舐め尽くし、涎を撒き散らしながら頬張る様は、それまで騎士道一筋に生きてきた麗しの剣士が、一匹の発情した牝獣へと変貌したことを如実に表していた。

（お、おほおおつ……も、もう出るのか!? はあはあ、ああつ、早く……早くラクにしてくれええつつつ!）

男根が大きく痙攣を始める。シエルはギチュツと口をすぼめて、思いきり前後に顔を振りたくり、爆発寸前の魔ペニス（しど）を扱（しど）きあげた。

「くうつ、出しますよ……ううつつ!」

ドビュオオオオオオツツツツ! ブチュウアアツツツ!

瞬間、喉の奥が熱い白濁の奔流に埋め尽くされた。滾りきった男根の爆発に、ムツチリとした女騎士の肢体が、肉悦により狂う。

「んぶふああああつつつ! んくんくつつつ! ふじゆるつつつ! んぐううんんんつつつ!」

堰を切ったように流れ込む熱い精液の流れが、お腹の中まで焼き尽くす。

（あ、熱いつつつ! 喉が焼けるううつつつ! こほおおつおつつつ! 気持ちいいツツ

徐々に焦点が戻ってきた切れ長の瞳には、信頼する女教官のあられもない痴態を目撃した男子生徒たちの驚きと、そして黒い情欲に満ちた顔が映る。

(あ、あああ……私は……な、なんてこと……をお……つ)

自分がしたことへの後悔と屈辱、そして羞恥の念が、いったばかりで快楽に溺んだ魅惑の女騎士の心を汚す。

国を守る騎士を目指す教え子たちに道を示さなくてはならない立場の自分が、敵に捕らえられ、あまつさえいいように蹂躪されるなど、高潔な誇りを持ってきたシエルにとつて、いつそ自害してしまいたいくらいの屈辱だった。

だが、そんなわずかに残る騎士としての想いも、この教室を満たす解き放たれた獣の空気によって、甘く蕩けるような感情へと変わっていく。

(み、みんな……生徒たちの……ああ、勃起してる……お、おおっ……ズボンが破れそうなくらいにギンギン……みんな興奮しているんだな……私の、ああ、はしたないイキっぷりに欲情して……っ)

教え子の前で恥を晒したからなのか、仇敵に敗北を喫したからなのか……本当の理由は分からなかった。

けれど、果てなき高みに到達したはずの美体は、収まるどころか、白銀の鎧に包まれた女の身体を溶かさんばかりに燃え盛る。

「ちよ……な……シエル教官……つつ!! な、なにを……はうつつ!」

シエルの柔らかい指先が、一人の生徒の股間へと伸びる。慣れないけれど情熱的な手つきでファスナーを下ろし、本能に素直な若い男のモノを引きずり出す。

「はああ……お、大きいな……割れた先っぽから汁が溢れてくるぞ……んああ、臭くていい香りだ……本当に美味しそうだな」

先ほど……黒衣の騎士に囚われ、嬲られる前までならば、思いつきもしなかった言葉が、今は自然と口をつく。

頬が自分でも信じられないくらいに紅潮し、まるで恋する少女のように潤んだ瞳で、完全に勃起した若肉棒を見つめている。

(と、止まらない……生徒たちのモノで……ペニスから目が離せない……つ。ど、どうなつたんだ、私は……あああつつ、でも今はそんなこと……つつ)

だらしなく半開きになった唇から、極上の肉を目の前にした子犬のような涎が垂れ落ちる。舌がハッハッと動き、鼓動が高鳴る。

「んあ、む……ふむぐうんつつ……ああつつ、んむうんんつつ!」

「き、教官つつつ?! はあつつつ、す、すご……んんつつ、ああああつつつ!」

突然の甘すぎる感覚に、肉棒を咥えられ生徒が切なそうな声をあげる。

だが、黒髪の女教官の唇は、そんなことなど関係なしに、自ら舌を絡めて、滾る欲棒を

扱き、舐め漁る。

「んんんんっつ、んちゆるっつっ！　ちゅぷっつ、むちゅっつ……ふむうんんっつっ！　んんっつ、ちゅぷるうううっつ！」

（おおおっつ、こ、これ……コレだ……あっつ！　この感触、この舌触りっつ！　んあ　あっつ、き、気持ちイイッツツ！　ほおおおっつ、気持ちイイッツツ！）

まるで快楽に飢えた情婦のように白銀の女騎士は、ムッチリと膨らんだ太腿をがに股に開いたまま、男子生徒の股間にぶら下がった玉袋までをも丁寧舐めしやぶっていく。

『ふふ、やっと自分の本性に気づいたようですね、教官。あなたは剣を握るよりも、そうやって牝豚みたいに、男をがっついていての方がぜんぜんお似合いですよ』

いつの間にか、シエルの身体から離れた暗黒騎士の魔術音声も、すでに彼女の耳には届いていなかった。

そんなくだらないことに気を回している時間など、今の彼女にあるはずがない。

（ああ、私……気づいてしまった……知ってしまった。淫らな行為がこ、こんなに気持ちイイものだったなんて……っ。おおおっつ、たまらないっつ！　生徒のペニスの味が……くっさい汁が……か、身体を燃やすっつ！　蕩けさせるううっつ！）

これまでの人生はすべて剣と国のためであった。騎士として名を馳せ、また教官として新しい騎士を育てる……そのために自らに禁じてきた甘い果実。

それがこんなにも甘美なものだとは思わなかった。一度口にすればやめられない。やめられるわけがない。

(もつと……もつと気持ちよくなりたい……つつ！　んおおおつつ、一本じゃ物足りないいいつつつつ！)

切なげに眉毛をハの字に落としながら、いったん肉棒から唇を艶っぽく離れたシエルは、繰り広げられる淫行を前屈みで見つめていた残りの男子生徒たちに、脂のたつぷり乗ったお尻を振った。

「お、お前たち……ふふ、なにを黙って見ているんだ？　穴はひとつだけじゃないだろ？　そんなことじゃ、合格点はあげられないな。さあ……」

娼婦さながら妖しく微笑んで言った女教官は、グイッと恥骨をせり出させ、右手でドロドロに蕩けきった陰唇の花弁を左右に押し広げてみせた。

「私を満足させてくれるのは誰かな？　んああつつ、は、早くしろっ。わ、私の方が切なくなってしまうじゃないか」

ヌチャツツという粘っこい音と鼻にツンとくる牝の本気の臭いが教室に広がる。

「くおおおつつつつ！　イイツツ、いいぞつつ！　ふおおおつつつつ！　おおつつ！　太いいつつつつ！　生徒のぶつといチンポが奥までズンズンツツつつ……んああつつ、もつ

と突くんだ……もつと奥までええつつつ！」

「つたく、なに言ってるんですかこの牝教官！ 突けじゃなくて、突いてほしいんでしょ？ たままないくらい淫乱なんでしょうがつつ！」

ズヌチユツツツツツツツツツツ！

溢れ出る愛液と、すでに何回中出しされたか分からない白濁のせいで、シエルの膣内はすでにドロドロの淫沼と化していた。

その快楽の沼地が、若い極太淫棒によつて更なる悦楽を開拓される。

「ひいいつ、ぎいいいいつつつ！ ああつ、ご、ごめんな……さいいいいつつつ！ シ、シエルが……淫乱な牝教官が悪かった……ほおおおつつつ、んおおおつつつ！ わ、私は教え子のチンポで感じる……最低の牝豚だ……た、頼み……ますうつつつ！ そんな牝シエルの気持ちよくさせてええつつつ！ 滾った精液ぶちまけてええつつつつ！」

王国を支える最高の騎士として、また有能な若い騎士を育てる美人教官としての顔はそこにはなかった。

誇りであった白銀の鎧は、銀色からドロついたヨーグルトのような精液に、隅々まで汚されてしまっている。

サイドアップの黒髪は、まるで精液の樽に漬け込んだかのように、ヌメっており、絞れば浴びたばかりの白濁が、ジワツと浮かんでくるかのようだ。

「あはあつつつつ！ お、お願いだつつつ！ 挿入れてくれつつつ！ ぶち込んでくれえつつつ！ おかしくなるうつつ！ ああつつ、もつとチンポが欲しいんだあつつつ！」  
 凛々しかつた美貌は、気がふれたかのような壮絶なアへ顔を晒していた。

初めは生徒たちを見下し、奉仕させ、また若い牡たちを弄りながら快感に浸るのが気持ちよかつた。

「ははつつ、そうですか。いやあ、知りませんでしたよ。あのシエル教官が変態なだけじゃなく、俺たちにいたぶられて感じるドMな人だったなんて」

「俺、教官に憧れてたのになあ。幻滅ですよ。だから、もつといじめてあげますからね。よかつたですねえ、Mシエル教官」

ズブチュツツツツ！ ドチュツツツツ！ ズチュツツズチュウウツツツツ！

「ほんおおおおおおつつつ！ 気持ちイイつつつ！ 気持ちイイ、いいつつつ！ ケ、ケツ穴キテるつつつ！ マ〇コもハメられてるつつつ！ んちゅんちゅつつ、はああつつ、口も、喉までええつつつ！ ほおおつつ！ イクツツ！ イグツツ！ ああつつ、わだぢ壊れるううつつつ！」

いつからだろう。いや、もしかしたら最初からだつたのかもしれない。

叩かれ、なじられ、突きまくられる。それがたまらなく快感だった。

黒衣の騎士に囚われたときも、悔しいと思ったが心の中では、なにかを期待していたのだ。

規律と信念に縛られ、奥の奥に溜まりこんだ拭い去りようのない自分の本質。騎士として剣を振るったのも、教官になったのも、すべてはマグマが弾けるようなたまらない快感を得るためだと、今ならはつきりと言える。

「そっち押さえてろ。さあ、今度はバックで犯してあげますよ。前と後ろ、それに教官の大好きなケツ穴を同時に二本刺しでね。ヨガつてくださいよ、シエル教官」

ズブヌウウツツ！ メキ、メキ……ジュブウウウツツ！

「あがあああああつつつ！ んああつつ、ひ、ひほんはひいひいひつつつ！ へ、へふも、ま、マ○ホふおおおおつつつ！ くひもつつ……んじゆるううつつ！ ほっほん、はひつへるつつ！ ほっほんのチンホはまつへるうううつつつ！」

犬のような屈辱のドッグスタイルから、各穴二本ずつ、計六本の男根の同時責めに、かつてないエクスタシーが背筋を駆ける。

「ひぐつつつ！ ああつつつ！ イイツツツ！ イヒイイツツツ！ 二本刺しいつつつ！ いっぱい擦れてるつつつ！ マ○コにケツううつつつ！ 広がるの気持ちイイツツツ！」

普通なら、肉壺の広がる痛みには悲鳴を上げるだろう。けれど、マゾの快楽を実感したシエルにとつて、それらの苦痛は甘い悦び以外のなにもでもない。

「はへええつつ………チンポいっぱい………シエル、最高つつつ！ んもほおおおつつつ！ おお



「おおつつ！ イクつつ！ イクウツツ！」

両手、そしてたわわに実った乳房はおろか全身に、滾りきった牡の肉棒が擦りつけられている。

生暖かい感覚が、敏感になりすぎた快楽神経を揺さぶり、シエルを壊す。

後から後から溢れ出るとめどない快感電流を受けながら、黒髪の女教官は白濁の嵐に歓喜した。

「おら、出るぞつつつつ！ ぶっかけてやるつつ！ 教官、いきますよつつ！」

「はひひひつつつつ！ 出してつつ！ 出してくださいひひひつつ！ シエルの身体を精液で一杯にしてつつ！ わらひの魂ごと、ザーメンに漬け込んでええつつつつ！」

ビブチャアアツツツ！ ドビシュツツツ！

豚のように四つんばいになったアへ顔に、限界まで勃起したペニスの先端から、鈍い白濁が一斉に放たれる。

「んひやああおおおつつつつ！ きつたああつつつつ！ 熱いザーメンぶっかけられてるうつつつつ！ おおおおおおつつ！ イグツツツ！ 穴全部でイクツツツ！ こ、ほおおとおおおつつ！ あ、あはつつ………チンポ汁最高ほおおおおつつ！」

白に覆われた黒髪と、ネットリとテカるムチムチの肌が、ガクガクと跳ね上がり、

「はああ………あはああ………ああ………さ、最高………おおつ」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**